モ遠州ノ差圖ナリシ、寛永年中ニ、御居間ノ脇ニ御學問所ヲ建ラルベシ迚、遠江守ニ仰付ラレ、其造作出來シ上覽有所ニ、一向上意ニ叶ハズシテ、偏ニ茶屋園ノ如クニシテ軒モ卑シ、天井ナゾモ物ズキ過テ、手ゼマニ大樣ナル事無リシカバ、思召相違シテ、頓テ作リ替ラレ、御張付ナドモ、皆砂子ノ泥引也シヲ、墨繪ニテ四季耕作ノ形、菓菰ノ類ニ仰付ラレシト也、其所仰ニ依テ相應ノ物ズキ有ベキ事也、心得有ベシト其頃ノ人評セリシ、

〔獨語〕近き世に人のもてあそぶ茶の道こそ、いと心得ぬことなれ、○中略かこひのつくりは、傳へ聞く維摩居士が方丈の室よりも今少しせばくして、小き窓をあけたるのみなれば、白晝にもくらく夏は甚あつし、客人の出入る口は狗竇の如くにて、くゞりはらばひしていれば、息こもりて冬もたへがたし、○中略又物ずきとて、家作より諸の調度に至るまで、常にかはりて珍らしくやさしきことをばすれども、茶人の家居は、必柱なども細く、障子の骨迄も風にたへぬばかりにほそくす、或はまろくゆがみたる柱を皮ながら用ひなどして、ものずきをかしと興ず、

〔茶窓閒話上一〕むかしは茶會の席とて、別に定めてはなく、其席々々に見合せて爐を切て點じ、珠光の座敷などは六疊敷なりしとぞ、但し爐の切所は何疊にても三所あり、其傳に、あげて切と、さげて切と、道具疊のむかふの地、敷居へおしつけて切との三ッなり、去かるに武野紹鷗が四疊半の座敷を作りはじめて、爐を下中に切しより已來、四疊半構といふ事ありて、其後千利休三疊大目構の座敷を造り、初て爐を中に上て切しより、大目構の爐といひならはし、其頃より昔からいひ傳へし、あげて切、さげて切といふ詞は捨りはて、今の世などは、むかしかゝる事ありしといふ事も去らぬ茶人多しとなん、

〔茶道八爐圖式上〕四疊半は維摩の方丈に象り、丈四方の度を以て、珠光紹鷗の比より興り、紹鷗利休に及で其法寢備り來、夫より休居士侘の一語を發明して、一疊半向爐を新製し、妙喜庵を隅爐